

卒業論文の要旨

論文題目	カント『純粋理性批判』における「無限判断」の必要性
氏名	田中 駿佑
メジャー	哲学
(要旨)	
<p>本稿では『純粋理性批判』における「無限判断」の必要性について研究を行った。まず第一章において無限判断から「制限性」のカテゴリーを導出することの妥当性を検討し、次に第二章ではアンチノミーにおいて無限判断が機能しているかを確認する。</p> <p>筆者の考えでは、無限判断から制限性を導出すること自体には異論はないものの、カントが制限性というカテゴリーに担わせている機能と無限判断から導き出された制限性の機能には意味のズレがある。無限判断（A は非 B である）から制限性を導出する場合、A が B である可能性が排除されたという意味で「制限」されている。一方、カントは実在性（ある）と否定性（ない）の中間項として制限性を設定している。それは「A は制限されたかたちで B である」ということを意味する。前者が「B でない」という意味で制限されているのに対し、後者は「制限された B である」を意味し、両者には意味のズレがある。それゆえカテゴリーにおけるカントの論理には問題があると言える。</p> <p>『純粋理性批判』のアンチノミー解決の仕方が無限判断的であるとする論者がいるが、そのような主張の根拠は薄弱であると筆者は考える。そのような論者の主張は以下の通りである。無限判断によっては主語概念の本性について何一つ語られることはない。第一アンチノミー（世界は空間・時間的に有限であるか、あるいは無限であるか）は「世界は量的に測ることのできないものである」という第三の選択肢を設けることによって解決される。その第三の選択肢は、その選択肢についての本性（表徴）が語られていないため、無限判断的であるという。以上のような主張は一応の説得力があるものの、第一アンチノミーにおける定立・反定立がなぜ偽になるのかという説明をすることができない。それゆえ、わざわざ無限判断を持ち出す必然性はないのである。</p> <p>第一章では、カテゴリーにおける無限判断についての論理の整合性が取れていないことが確認され、第二章ではアンチノミーにおいて無限判断が機能していないことが分かった。以上のことから、『純粋理性批判』における無限判断の必要性は疑わしいものだと考える。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>カントは「超越的論理学」において、「無限判断」を「肯定判断」・「否定判断」とは区別した判断として挙げ、「無限判断」に「制限性」のカテゴリーを対応させている。解釈者によってこの「無限判断」の評価は大きく分かれているが、著者はカントが「制限性」のカテゴリーを導出する際の問題点を指摘し、またアンチノミーにおいて「無限判断」が機能しているという先行解釈を批判している。</p> <p>著者の結論はカントの「無限判断」の必要性に疑問を付すもので、これは既存の問題枠組みの中にもありながらも、先行解釈を丁寧に批判検討することで、今後も参照に値する有益な議論を展開している。したがって、本論文を優秀卒業論文として推薦する。</p>	